

昭和の南海地震体験談

氏名:永井 キミ子(ながい きみこ)
生年月日:昭和5年8月19日
地震を体験した場所:由良町・自宅寝室
当時の家族状況:父、母、弟3人、妹3人



1) 地震発生時の状況

当時は中学3年生。自宅寝室で就寝中、「ゴオーツ」と揺れてきて目が覚めた。ガタガタ揺れあまりにも怖かったので、何も考えられず、揺れが収まるのも待たず、表に飛び出した。激しい揺れで立っていることができず、皆で泣きながら地面に座り込んだ。前の電信柱がショートして、パチパチ鳴っていた。そのままそこで揺れが収まるのを待った。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まったので着替える為に家に入ったが、電気は全部消えていた。幸い、船の充電バッテリーを家に持って帰って来ていたので、父がそれで電気をつけ、皆が着替えた。その後は寝間にも入らず起きていた。暫くすると、外で「津波やー！」と言う声が聞こえてきた。誰かはわからないが、この辺りは漁師が多く、安政の地震・津波の被害も言い伝えて聞いていたのか、津波のことは皆頭に置いていた。漁師の人は浜に様子を見に行き、潮が引くのを見て津波が来るとわかり、叫んで知らせてくれたのだ。自宅からはすぐに高い場所に行けたので、濡れることなく避難できた。網代地区は家が密集して、潮も家の間をつたいながら来るので、人を引き込むという勢いではなかった。障害物があれば潮も弱くなるのだろう。第1波はそれで済んで、潮は引いていったが、大人達が「まだ来るぞ」と言い、どれだけの大きさの波が来るかわからないので、さらに山の上まで逃げた。上へ上へと逃げたので、上から海の様子がわかった。最初は薄暗かったのでよく判らなかったが、「バリバリバリッ」という音がしていた。物を壊して押し寄せて来ているのだろう。第2波の時は川を上って行くのがよく見えた。第2波が引く時は、水が由良川に「ザーツ！」と勢いよく流れ込んで行くのを見た。



3) 家族の行動・被害

家族全員、家にいたので、一緒に逃げ、明るくなってから一緒に戻って来た。自宅は天井まで浸かっていた。土地が低いので、まず溝から水が入ってくる。家の中はぐちゃぐちゃで、教

科書も濡れてしまい、使えるものは何もなかった。畳も全部ダメになった。避難するとき家の戸を閉めていたので、家は壊れなかった。閉めていなければ砕かれていただろう。

4) 集落・周囲の被害

海軍の訓練所にあった仮設住宅が沖から来た潮に押され、砕けずそのまま横浜地区まで流された。阿戸地区では海の近くにわりと簡単な造りで建てていた家が、屋根の上に人が乗った状態で前の島まで流されたらしいが、津波は陸に近いほど勢いが強く、沖に行くと静かになるので、その人は助かったそうだ。それから、昔の家は畳を床の上に乗せているだけだったので、潮が来た時、そのまま上に上がり、引いた時にそのまま下りて来て、畳の上の布団や、そこにいた人が濡れずに、潮が引いた時に逃げて助かった人もいた。

山の上で避難している時、下でおばあさんが「助けてー、助けてー」と叫んでいた。大人達もどうすることも出来ず、そのうち、とうとう声は聞こえなくなり、その方は亡くなった。

5) 地震・津波後の生活

弟妹は母の親戚が預かってくれた。一番上だったので、近所の家の2階に泊まらせてもらった。2階のある家は2階で寝起きすることが出来た。仮設住宅のようなものもなく、そういうふうに皆、分散した。自宅で寝起きできるようになるまでは随分かかった。

食べ物は炊き出しがあったり、親戚が持って来てくれたりした。水は元々担いで溜めている水を汲みに行っていた。海軍の防備隊がお風呂を焚いて開放してくれた。そこに入りに行くのが嬉しかった。学校は3学期から通常通り始まった。家はどこも壊れておらず、片付けは親戚の手伝いもあり、どうにか元の生活に戻れた。

6) 次の災害への備え

いざ地震が起こったら、非常袋を持って逃げる余裕がないのではないか、山の上に小屋を建て、そこに必要なものを入れておくしかないのではないか、と思うが、持ち出し袋は用意している。

自宅から避難場所への自分なりのコースを作っている。が、途中の家が潰れて道がふさがってしまうともう行けないので、まずは自宅前の駐車場に逃げるつもりだ。